

# 福祉避難所利用低調

西日本豪雨の被災地で、

ケアが必要な高齢者や障害者ら災害弱者を受け入れる福祉避難所の利用が進んでいない。被害が大きい岡山県倉敷市、広島市、愛媛県宇和島市では災害弱者を含め約2900人が避難生活を余儀なくされているものの、利用は14日時点で約20人にとどまる。過去に一般人にどこも。過去に一般人が避難者が殺到した事例があり、存在を積極的に知らせていないことが、妨げの要因となっている。

自治体は、体育館などで生活に支障を来す高齢者や障害者、妊婦らが災害時に安心して過ごせるよう、バリアフリー化した施設などを福祉避難所に事前指定。認知症の高齢者を支援する団体の一つは「サポートが期待でき、本人や家族には安心だ」と指摘する。倉敷市では約2450人が避難生活を送る。35施設を福祉避難所に指定しており、保健師らが避難所を巡回し、認知症や車いす利用の高齢者、障害者ら21人を8施設で受け入れた。2016年の熊本地震では、一般の避難者が福祉避難所に殺到したことなどから問題になった。倉敷市の担当者は「必要のない人が来ると本当に必要な人が入れない。このため一般避難所では周知せず、保健師らが現場で対象者を判断している」と話す。

支援者は約4千人と想定。だが担当者は「保健師や職員から要請がなく、実際は福祉避難所を開設していない」としている。広島市では避難者約2600人のうち、福祉避難所に入ったのは2人にとどまる。

日本大危機管理工学部の鈴木秀洋准教授は「行政は巡回で対象者を把握できると繰り返してきたが、保健師の数は限られる」と指摘。「多くの人が福祉避難所を知らなかったと訴えている」と述べ、周知徹底を求め。さらに「避難が長期化するれば高齢者らの死に直結する恐れがある。関係機関が連携を強化してきめ細かくニーズを把握すべきだ」と強調した。

## 切り絵や紙粘土など56点

### 県庁自閉症の30人が作品展



自閉症のある人たちの作品展が2日、県庁で始まった。県内の中学生から30代までの約30人が制作した絵画や立体、書など56点が並び、県とNPO法人県自閉症協会の主催。6日まで。

同協会によると、自閉症は先天性の発達障害の一つ。言葉や集団生活が苦手な一方、見たり経験したりして覚えることが得意といった特徴があるという。作品展は自閉症への理解を深めてもらうようと、毎年この時期に開いている。

多数の仮面の絵を切り抜き紙に貼り付けたものや、県内外の信号機がテーマの写真集、下関市のバス路線図など、それぞれが関心を持ったテーマを表現。鳥の羽ばたきの音などを紙粘土で形にしたものや柳井市の民芸品「金魚ちょうちん」、さをり織りのバッグなどの立体作品もある。

同協会の椎木弥寿子副会長は「自閉症は特別なものではない。みんな好きなこととにひたむきに生きている」といふことを知ってもらえれば」と話している。

約1700人が避難生活を送る宇和島市では、福祉避難所となる施設をあらかじめ9カ所指定し、約2700人を受け入れる態勢を取っている。対策は市の専ら

対策は市の専ら